

“飲めない”受賞者のあいさつに爆笑

サントリー学芸賞贈呈式

第三回サントリー学芸賞の贈呈式が、七日午後五時から東京・丸の内内の東京会館で開かれた。

まず主催者のサントリー文化財団、佐治敬三理事長からあいさつがあり、十人の受賞者にそれぞれ賞はいと副賞百万円が贈られた。海外にいるため村松岐

夫京大教授（『戦後日本の官僚制』—東洋経済新報社）、岡崎久彦駐米公使（『国家と情報』—文芸春秋）、平川祐弘東大教授（『小泉八雲』—新潮社）の三人は代理の人が出席した。紅一点の評論家・塩野七生さん（『海の都の物語』—中央公論社）はイタリア・フィレンツェの自宅からかけつけて言葉少なに感激を語った。

洋酒メーカーをバックにする財団からの賞とあって戸惑い気味だったのが、下戸の中嶋嶺雄

東京外大教授（『北京烈烈』—筑摩書房）と中野三敏九大助教授（『戯作研究』—中央公論

社）の二人。中嶋教授は一酒が一滴も飲めないのに賞をもらうのは悪いと思ったが、よく考えしてみるとオレンジジュースを愛用しているのに気づいて安心した」と笑わせ、中野助教授も「実は私もそうだが、恩師が二日に一本、年間百八十本のボトルを空けているウイスキー党で、飲む方は師に任せ、賞は私にいただくことに決めた」とあいさつ、会場を爆笑させた。

また、安場保吉阪大教授（『経済成長論』—筑摩書房）、芳賀徹東大教授（『平賀源内』—朝日新聞社）、金子務中央公論社「自然」編集部次長（『アインシュタイン・ショック』—河出書房新社）の三氏は同じ東大教養学部同窓生。そろっての受賞をよろこび合っていた。

最後に、吉沢英成甲南大教授（『貨幣と象徴』—日本経済新聞社）が「本は出版されると一人歩きする子供というが、その子供が認められてうれしい」と締めくくった。



仏教講座 12月午後2時、東京